

■WAVE

・“心”をつなぐバレーボール ————— 吉原 知子… 3

■アクセス ナウ!

・子どもの成長を信じて ————— 鈴木 康浩… 4

■実践報告+講評と助言/2年生・折り返し障害物リレー

・子どもたちが夢中で運動感覚を身につける新しい学習過程 ——— 石井 岳夫… 6

・動きの面白さに着目した魅力ある学習過程の構想 ————— 細江 文利…10

■実践報告・サークル紹介/宮城県

・「人とのかかわり」の中から

技能向上と運動の楽しさ体験を(6年生・マット運動) ————— 関谷 俊一…12

・仙台市小学校教育研究会体育研究部会 ————— 紺野 利次…15

■ビジュアル解説/低学年・鉄棒を使った運動遊び ————— 平野 文夫…16

■連載/外野席から〈第20回〉

・アマチュアの復権はあるか ————— 岡崎 満義…18

■羅針盤〈第49回〉 新学習指導要領から これからの体育を考える

・座談会：やってみる—ひろげる—ふかめる 新たな学習過程の構想をめぐる

鈴木 聡/細江 文利/村田 芳子/池田 延行…20

◆◆◆ 著者紹介 ◆◆◆



石井先生◆綾南小学校では、新学習指導要領の実施に向けて、「習得=やってみる」「活用=ひろげる」「探究=ふかめる」の3つのキーワードを重視しながら、一歩一歩着実に、校内研究を進めているところです。



平野先生◆インフルエンザの流行で、授業なども計画通りにいかず、先生たちは四苦八苦しています。しかし、今こそ保健授業の充実のチャンス! 病気の予防から生活を見直し、教科としての保健を深める絶好の機会となることを!



細江先生◆学習指導要領が改訂され、現場に出向く機会が増えました。具体的に体育授業の流れが動きはじめていることを、季節の移ろいのようにひしひしと肌で感じています。これから体育がどう変わっていくのか、大変楽しみです。



鈴木先生◆1年生を担当していますが、何より遊びのフレームをつくれるようになったところに、成長を感じています。伝言ゲームの面白さがわからなかった子たちが、先日のお楽しみ会では大盛り上がり。遊べるってすごいことですね。



関谷先生◆去年の楽天はCS進出と大きく躍進し、ベガルタもJ1昇格を決めるなど仙台は盛り上がりました。子どもたちにもその感動は十分伝わったことでしょう。私も授業を通して、運動の楽しさを伝えていけたらと思います。



村田先生◆寅年の今年はなんと5回目の年女、ため息が出てしまいます。いつまでも「若手」という意識でいたのに、自称「踊る旅人」も巡業中に何十年ぶりに肉離れを起こし……。でもまだまだ「アラカン(還)」のパワーを発揮します。



紺野先生◆今年度より会長に就任しました。自分の学校では「天気の良い日は外遊び」を子どもたちに求め、時間を見つけて一緒に遊んでいます。サッカー『ベガルタ仙台』の熱烈サポーターを自認しています。



池田先生◆移行期間での体育の授業では、新しい試みなどをいくつか見ることができました。私も時々「走り高とび」の授業を行っていますが、いつの時代でも子どもたちは元気だ!ということを実感しています。

どんなスポーツでもまずは、その競技を楽しませることが大事だと思います。バレーボールは手が痛いとか、技術が難しいとかいわれますね。サーブを打っても相手コートまで届かない子どもにとってはおもしろくないはず。だから、普通のボールを使って相手コートに届くところからボールを投げ入れる。レシーブする子は、そのボールを“レシーブの姿勢”でキャッチする。キャッチしたら次の人にボールを投げる。受ける人は“トスを上げる姿勢”でキャッチして、次の人に投げる。最後の人はジャンプして“スパイク”のようにネットの上から投げ入れる、というゲームにする。このときに3秒ルールを採り入れて、ボールをキャッチしたら3秒以内に次の人にボールをパスするようにします。3秒ルールでゲームのリズムもバレーボールに近いものになります。この“キャッチバレーボール”に子どもたちは夢中になって取り組みます。難しいレシーブも、ボールの正面でレシーブすることができるようになるんです。

最初に技術、ではないと思います。いかに競技そのものを楽しませるか。おもしろいと思わせるか。子どもたちを夢中にさせるかがポイントですね。そうすると自然と技術は身につくのではないのでしょうか。

中学から始めたバレーボールですが、長い競技生活の中で「バレーボールってこんなに楽しいんだ！」と実感できたのは、イタリアでプレーしたときでした。それまでは「勝負」が中心にあって、日立という名門チームで連覇しなければいけない、勝つことが当たり前というプレッシャーの中、本当の意味でのバレーボールの楽しさがわかっ

“心をつなぐ” バレーボール



吉原 知子

ていなかったと思います。もちろんイタリアでも「勝つ」ことは目標ですが、イタリアの選手はバレーボールを中心にした生活のオンとオフの使い分けがうまいと感じました。バレーボールという競技を楽しんでいる姿が非常に印象に残っています。できないプレーや技術をマスターするまでの過程においても、どうやって楽しく技術を学ぶかという感じですね。日本にいたときは四六時中どうしたら技術を身につけることができるのか、ということが頭から離れない。イタリアでは技術を遊びながら楽しく学ぶことが大切なんだ、ということ強く感じました。

バレーボールというゲームはボールを“つなぐ”ゲームです。1本目がないと2本目がない。2本目がないと3本目がないんですね。とにかく1本目の人は必死にボールを上げて、2本目の人に「お願い！」という気持ちでボールをつなぎます。2本目の人は1本目の人がつないできたボールを3本目の人につなぎます。3本目の人はそれを「ありがとう、絶対決めるんだ！」という気持ちでスパイクします。つないだボールには、つないできた人の気持ちが込められています。

私自身子どもたちに指導するときには、ボールをつなぐということは“心をつなぐ”ことなんだよ、ということ大切に指導しています。こんなこともバレーボールを小学校の授業で行うときには大切にさせていただけたらうれしく思います。(談)

よしはら・ともこ 1970年北海道生まれ。元全日本女子バレーボール日本代表。高校時代に全日本メンバーに選出される。92年バルセロナ、96年アトランタ、04年アテネの3回のオリンピックに出場。06年現役引退後はバレーボールの解説者としてテレビ等で活躍する。09年4月、筑波大学大学院に入学、体育学を学んでいる。

子どもの成長を信じて

——あるサッカーコーチの取り組み



私が少年サッカー時代を過ごした環境はまさにスパルタ。怒られた記憶しかない。取材を通じて出会う優秀な指導者に指導法をうかがうと、幼少期にぜひお会いしたかったと、何とも言えぬ気持ちに駆られることがしばしばある。

武蔵野市の少年サッカークラブ、関前S Cの監督を20年務めている小島洋邦さんとの出会いもまさにそうだった。関前S Cは、東京都選抜やF C東京ジュニアユースに人材を輩出する武蔵野の強豪クラブ。ここでは、関前S Cでの小島さんの取り組みを通じて、子どもの教育の一例や成長過程を紹介したい。学校教育にそのまま生かせる素材になるはずだ。

子どもの特性の匂いを感じてあげる

初めて関前S Cの練習グラウンドを訪ねたとき、「小島マジックって、呼んでいるんですよ」

と、何人ものお母さんが教えてくれた。5年生までもっぱらBチームだったA君が、6年生になり、6年生チームを担当する小島監督に突然、Aチームのレギュラーポジションを与えられた。フォワードに大抜擢され、やがて得点を取って活躍するようになり、ほどなくレギュラーに定着した。小島監督が言う。

「匂いですね。A君はサッカーではおとなしいけど、休憩時間の遊びでは大将だった。そこは伸ばせると思ったんです。そういう場面から子どもの特性を感じることは多い。きっかけを見つけて、その子に最適な環境を与えてあげられればいい」

「気にするな、絶対にうまくなるから」

関前S Cはどんな子どもでも入部できる。にもかかわらず、都大会に出場する強豪クラブとして武蔵野地域に君臨している。いまや部員は130人の大所帯で、関東選抜や東京都選抜に選ばれる子

どもから、サッカーを始めたばかりの女の子までが、同じグラウンドで分け隔てなく練習する。

「みんなが同じことを毎回30分間必ず繰り返します。地道だけど、それが一番重要なんです。Jリーグのサッカーをここでやる必要はありません。日体大生でも一輪車を乗れるまでに時間がかかりますが、幼い子はすぐに乗れるようになります。サッカーだって、小学1年生のときにやるべきことがあるんです。疎かにしないでしっかり基本を繰り返す。ここでは、卒業するまでに全員が両足でしっかりボールを蹴れるようになるんですよ」

1学年に30人もいるので、当然、試合ではAチームやBチームの振り分けがある。Bチームに振り分けられた子どもは当然ショックを受けるだろう。そんなとき小島さんは、

「気にするな。絶対にうまくなるから」

と、子どもの目を見てしっかりと言葉で伝える。「ある代のBチームが初めはまったく勝てなかった。でも、基礎的な練習を繰り返して、試合では全員がお互いを助けるプレーを徹底したら、だんだん勝ち負けになってきたんです」

並の実力のチームに勝てるようになったその代のBチームは、卒業間近の3月の大会ですると勝ち上がって準優勝をした。翌日の卒団式で子どもたちが、ごそごと「これあげる」とトロフィーを小島さんに手渡した。

「子どもが『負けても負けても、僕たちをずっと見てくれてありがとう』って。ここまで長く指導しているのは、それがきっかけなんです」

どのチームの子どもでも、できるはずなのにやろうとしないときには怒る。その子のレベルに合った助言をして、できる範囲のプレーを頑張らせる。一定の成果が出たらそこで褒めてやる。その繰り返しだという。

逆に、うまい子は減多に褒めない。

かつて関前S Cには、今や日本女子サッカー界

のスター、日テレ・ベレーザ所属でU19女子日本代表の岩渕真奈選手も所属していた時期がある。

「褒めることをしないかわりに、礼儀や挨拶を徹底させました。今、彼女は日テレ・ベレーザのレギュラー選手として活躍していますが、まだ16歳で一番の下っ端です。率先して雑用もこなすので、先輩たちに可愛がられているようです。ただのうまい子になってほしくなかったですから」

サッカーは、うまい子が好き勝手プレーしても、ときには勝ってしまうスポーツだ。だからこそ、うまい子を絶対に王様にしない。下手な子がチーム内で成長する機会を阻んでしまうからだ。

「うまい子がひとりよがりなプレーに走ったら、私はその子をしばらく試合に出しません。うまい子が下手な子を思いやってフォローする。『お前が点を取れるのは、他の10人がいるからだろ？』と、チームプレーを徹底させるんです。互いを思いやる気持ちを育て、全員でサッカーをさせるようにすると組織力が備わってくる」

ピッチ外での取り組みからも思いやりの気持ちは十分に育める。

「例えば、コーチ陣がグラウンドの芝刈りをやるときに、初めから子どもたちに『手伝いなさい』と言わないようにするんです。高学年の子どもたちの何人かが手伝いを始めると、それを見た低学年の子どもたちも一緒に手伝うようになる。本人に気づきのきっかけを与えると、自然と周囲の動きに敏感になって、思いやりの気持ちが育まれていくんです」

親やコーチが戻ってくる

子どもを取り巻く大人の存在も重要だ。

小島さんは子どもを預かったとき、お母さんたちにこんなふうに伝えているという。

「2年かかるか、3年かかるかわからないけど、卒業するまでに子どもは必ず成長するから、信じて待っていてほしい」

だが、Bチームに振り分けられた子どものお母さんはショックで観に来なくなる。いつもお手伝いに来てくれるのは、Aチームでレギュラーの子どものお母さん。それでも徐々に力をつけて、Bチームが勝った、うちの子が1点をとった……となると、お母さんが1人、また1人と戻ってくる。「うちの子もこんなに上手になったんですね」

「そうやって毎年卒業していく感じですよ。そして、ここでサッカーを好きになって卒業した子どもが、今度はコーチとしてクラブに戻って来てくれる。たくさんの大人たちが子どもを見守る環境ができると、みんなで子どもを育てるという意識も共有できて、クラブには伝統的に受け継がれる強さが備わっていくんです」

「好き」になるきっかけを与える

小島さんは元々、子どもと遊んだり話をしたりするのが嫌いではなかった。だから、子どもと遊びながら自分もサッカーを楽しむ感覚が常にある。

「リフティングの曲芸を見せてあげると、子どもの目はキラキラと輝きますよね。おもしろいと感じたことはひとりでも練習するようになるんです」

大人が子どもにサッカーの楽しさを表現してあげる。“サッカーってこんなにおもしろいんだ”と思えるきっかけを与えてあげる。不思議なことに、サッカーがうまくなかった子どもが、運動会で一番をとるようになった。学校の成績が上がった例もあるという。

「本当にサッカーが好きになった代は、毎朝5時から自分たちで勝手に朝練習を始めるんです」

指導者になって20年。小島監督は初めから今の関前SCを確立できたわけではない。まったく勝てないチームの、子どもたちの小さなプレーの成功をみんなで喜び、少しずつ階段を上ってきた。指導者仲間と試行錯誤を繰り返して、最善と思う方法を実行してきた。

20年の月日に、脈々と、静かに熱く流れる信念。子どもは絶対に成長する——。経験則からくる“ぶれない”信念に、親やコーチたちは魅了される。そこに人が集まってくる。関前SCの練習グラウンドには常に20人近い大人がいる。みながボランティアである。

いかに子どもを信じてやれるか。子どもに喜びを与えてやれるか。大人が目を輝かせて楽しさを伝えられるか。

私がスパルタの環境下で少年サッカー時代を過ごさざるをえなかったように、通常、子どもは指導者を選べない。学校教育の現場ではなおさらだろう。ならば、子どもの成長は、指導する側の「信念」「熱さ」「魅力」などに大きく左右される。

子どもたちが夢中で運動感覚を身につける新しい学習過程

神奈川県綾瀬市立綾南小学校教諭 石井 岳夫

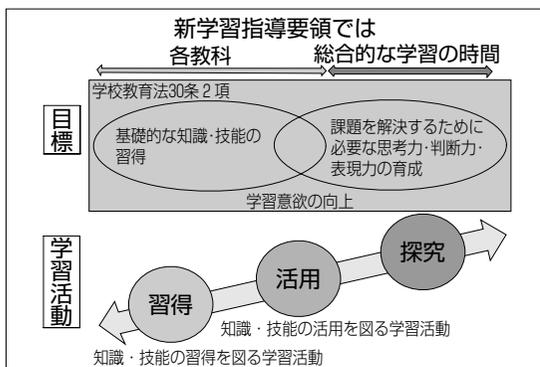
1. 「めあて1」「めあて2」から

「やってみる」「ひろげる」「ふかめる」へ

本校はこれまで、現行の学習指導要領にのっとり、「自ら運動する意欲」と「積極的に運動に親しむ資質や能力」を養うことに重点を置き、児童が自ら考え課題（めあて）を立て、その解決方法を自分で見つけ、課題（めあて）を解決していく力を養うことを目標として授業研究に取り組んできた。平成19年度から2年間は、東京学芸大学教授、細江文利先生にご指導いただき、新学習指導要領の実施に向けて、「基礎・基本の充実」と「習得（やってみる）」、「活用（ひろげる）」、「探究（ふかめる）」という3つのキーワードを、体育の授業の中にどのように位置づけていくかについて、研究を進めてきた。

新学習指導要領で述べられている「習得」「活用」「探究」というキーワードは、学習内容ではなく、学習活動である。すなわち、「習得」という内容を教え込むのではなく、「習得」という型を用いて「基礎的な知識・技能」を児童に身につけさせることが求められている。それにあたっては、児童が自発的に技能を体得することを期待するのではなく、教師の意図的な指導やしかけによって、運動の特性を身につけさせることが大切であるととらえた。

ここで留意したいのは、基礎・基本の習得に固



執するあまり、かつての体育で行われたような、画一的な練習や、児童の意欲を引き出しにくい基本練習の反復に終始してしまい、体育嫌いの子どもをつくってはいけないということである。また、基礎技能を重視するあまり、すぐれた児童の指導にばかりとらわれて、結果的に、苦手な子どもへの対応がおろそかになってしまうのも問題であろう。

体育の授業は「楽しく」なければならない。「楽しい」からこそ「やってみよう」と思い、「上手になりたい」と願ひ「ずっと続けていきたい」と考えるのではないであろうか。

以上のことから、本校では、習得にあたる部分を「やってみる」という言葉に置きかえ、画一的な基本練習ではなく、児童が興味をもちそうなゲーム的要素を含み、なおかつ、夢中で取り組んでいるうちに運動の特性を身につけていけるような活動を取り入れていくことにした。

今回は、平成20年11月14日に行った研究の中から、低学年の「基本の運動」（新学習指導要領においては「走・跳の運動遊び」）を取り上げ、2年生の子どもたち1人ひとりが、楽しみながら陸上運動の基本的な運動感覚を身につけることを考えた指導の実践例を紹介したい。

2. 授業実践について

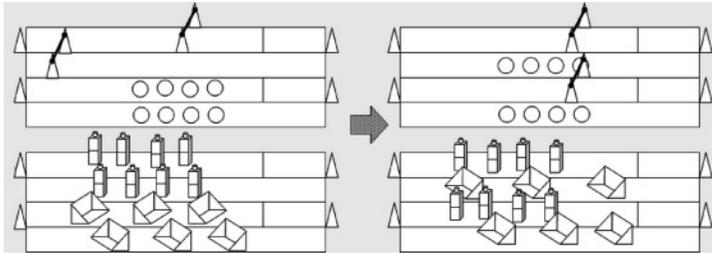
本単元の学習では、4種類の障害物を用意し、それらをよけていくときの体の動きのおもしろさや、うまくよけられたときの達成感などを味わわせたい。また、勝敗だけにこだわらず、チームで協力して楽しむことも大切にしていきたい。

(1) 単元名…2年「折り返し障害物リレー」

(2) 運動の特性

障害物競走は、目標物としての障害物を走路に置き、直線に走る、曲線に走る、とび越える、くぐる、回るなどのさまざまな走り方やよける動きを楽しみながら、チームとチームでその速さを競

〔図2〕「やってみる」の場



●学習の3つの条件

①学習のしかたを知る（学び方を学ぶ）

低学年の児童は、学習の進め方を理解するのに大変時間を要するため、オリエンテーションは時間をかけて行い、単元全体の流れ、1時間の流れ、用具の準備・後片づけのしかたをわかりやすく説明した。

②運動時間の確保

準備、後片づけ、集合などを短時間でできるように指導することで、できるだけ運動時間を確保できるように配慮した。

③学習の約束

本単元の流れがスムーズに行えるよう以下のような学習の約束を徹底した。

- ・話を聞くときは、話をしている人の顔を見る。
- ・移動や集合は、かけ足で動く。
- ・グループの中で自分の役割をきちんと果たす。
- ・友達のいいところを見つけ、認めるとともに自分自身にも生かす。

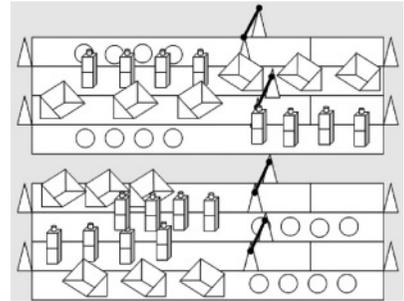
(3) 「やってみる」「ひろげる」での工夫

「やってみる」では、まず、「くぐるバー」, 「わっか(輪)」, 「ペットボトル」, 「段ボール」の4つのコースをつくり、1つひとつのよけ方を練習できるようにした。さらにその後の学習時間の初めには、自分でコースを選んで練習できるような場を設定した。

次に、「くぐるバー」と「わっか」, 「ペットボトル」と「段ボール」の2つずつの障害物を越す場を設定した。少し慣れたところで、チームで対戦できるようにした(図2参照)。

「ひろげる」では、「やってみる」で経験した4つの障害物を全部コースの中に置き、それらを置く順番を自分たちで工夫できるように設定した。1回戦の終了後に、相手チームの場を経験することにより、2回戦の場づくりに生かすことができるようにした(図3参照)。

〔図3〕「ひろげる」の場



個人差や運動の特性に配慮して、みんなが楽しめる場づくりを心がけた。例えば、走る距離を短めの片道20mに設定し、走力による差をあまり大きく生じさせないようにしたことで、走るのが苦手な児童も、あまり引け目を感じずに、楽しく参加することができた。

4. 成果と課題

- <成果> ○チームの運動能力が均等になるように編成をしたので、児童1人ひとりの運動能力の差を考慮して、走る距離に差をつけるという方法を使わなかったことはよかった。
- 児童が自主的に学習に参加できた。進んでチームごとに並んだり、応援や話し合いをしたりする姿を見ることができた。
- チーム全員が何らかの役割を担うようにしたので、1人ひとりが参加意識をもって活動できた。また、自分の役割分担でなくても準備や後片づけを進んで手伝っていたので、チームとしての意識や思いやりの心が育っていた。
- 1年生のときとだいたい同じコース設定にしたので、スタートやゴール・走るコースや応援の場所などをまちがえることがなく、児童は安心して走ることができた。
- ルールの再確認・走り方や相手チームの頑張っている児童の発見などがあつた。また、走ることが苦手な児童にも温かい声援が送られた。
- <課題> ○少数ではあつたが、自分のチームが負けるとチームのメンバーに不満をぶつけたり、活動に協力しなかったりする児童がいた。

ふだんの生活や他の教科でも、友達のよさを認め合ったり一緒に活動する喜びや達成感を味わわせたりする中で、思いやりの心を育てていきたい。(いしい・たけお)

※執筆協力：新倉智恵子先生, 角谷智子先生, 田中直子先生

動きの面白さに着目した 魅力ある学習過程の構想

東京学芸大学教授 細江 文利

1. どんな学習をさせたいか

今回の学習指導要領の改訂をめぐり、中央教育審議会・教育課程部会では、「確かな学力の育成」について、次のように言及している。「(前略) 基礎的・基本的な知識・技能の育成 (いわゆる習得型の教育) と、自ら学び自ら考える力の育成 (いわゆる探究型の教育) とは、対立的あるいは二者択一的にとらえるべきものではなく、この両方を総合的に育成することが必要である。そのためには、知識・技能の習得と考える力の育成との関係を明確にする必要がある。(中略) これらは、決して一つの方向に進むだけではなく、相互に関連しあって力を伸ばしていくものと考えられる。知識・技能の活用が定着を促進したり、探究的な活動が知識・技能の定着や活用を促進したりすることにも留意する必要がある」(教育課程部会『審議経過報告』平成18年2月13日)

筆者は、改訂学習指導要領に潜むこうした学習と指導の考え方や、今日語られている創発的な学びの理念を背景に、授業の流れを「やってみる」「ひろげる」「ふかめる」の3つのフレームで構成することを提案している。その流れは、教師が提示するやさしい動きや運動の行い方から始まり(やってみる)、理解したことを広げたり、アイデアを出し合ったりしながら(ひろげる)、願いやこだわりを膨らませたり、それをみんなで共有したりする(ふかめる)活動としておさえられる。

こうした「習得」・「活用」・「探究」を基盤にした授業の進め方は、けっして「何を」学習させたいかを時間軸に沿って一直線上に並べ、系統的に学習させる観点のものではなく、「どんな学習をさせたいか」、学び方に寄り添った学習軸で構成される点を特徴とする。

例えば今回の綾南小学校の実践では、「学習指導要領で述べられている「習得」「活用」「探究」というキーワードは、学習の内容ではなく、学習活動である。すなわち、「習得」という内容を教

え込むのではなく、「習得」という型を用いて「基礎的な知識・技能」を児童に身につけさせることが求められている」と理解されている。また、綾南小学校では、「習得に当たる部分を「やってみる」という言葉に置きかえ、画一的な基本練習ではなく、児童が興味をもちそうなゲーム的要素を含み、なおかつ、夢中で取り組んでいるうちに運動の特性を身につけていけるような活動を取り入れることにした」と示している。この点は、2つの重要な意味を含んでいると考える。

第1点は、「習得」・「活用」・「探究」という言葉は、教師側に立った指導過程の概念であり、「どんな学習をさせたいか」を意味している。一方、学習過程は子どもの側に寄り添った概念である。子どもが、どんな段階をふんで、どんな学習をするかに関する学習の道筋のことである。そのためには、子どもが主体的に「どんな学習をしたらよいか」子ども自身にわかりやすい言葉で示すことが大切である。「何を」学習するかではなく、「いかに」学習するか学び方の観点である。その意味で、「やってみる」「ひろげる」「ふかめる」のネーミングはわかりやすいということである。

第2点は、「習得」の意味のとりえ方である。「習得」のフレームでは、「画一的な基本練習ではなく」と強調しているように、「習得」の意味は、「活用」を触発するような「面白い内容」であることが大切である。「習得」と「活用」が行ったり来たりの往還関係であることと教育課程部会の見解にもあるように、「習得」の意味は、単に基礎的・基本的な内容ということにとどまらず、「活用力」を十分に呼び込むような学習が大切である。そのことが、綾南小学校の「やってみる」「ひろげる」の実践で読み取ることができる。

2. 体育授業の中で「心地よい経験」を大切にす

(1) 「心地よさ」と気づき

「やってみる(習得)」のフレームにおいて「活

用」を触発する「面白い内容」が大切であることを述べてきたが、この面白さは心地よさと無関係ではなさそうである。例えばドイツの実践学者トルトラインは、これまでの授業実践を反省し、次のようなことを述べている¹⁾。

「走る」という運動への指導において、記録を重視するあまり、その「面白さ」を伝えてきただろうかという反省をふまえ、「より速く」という価値観からの脱却を図ろうとした。そこで、年老いた人や子どもがなぜ喜んで走ろうとするのかに着目し、結果、「気持ちいい」と感じる心地よい経験が共通して感じられていたということがわかった。そのことにより、体育の授業で、心地よい経験の保障をすることが大切であることを主張した。一方で、心地よい経験によって、「現在の自己の状態（感覚・知覚・感情・環境）に気づく」ことに注目し、走るという運動を用いて、「肯定的な自己像」の確立をはかることを示唆した。また、そのための授業化の手がかりとして、以下の4点をあげている。①感覚を意識化すること。②全身の弛緩と緊張を感じる。③運動経過の意識化をはかること。④呼吸を意識化することなど。

こうした「気づき」を起こす手立ては、日常的な授業実践の中で行われていることが多い。ルールやリズム、場を工夫することにより、「この動き面白い、さっきと何か違う」という身体感覚的気づき・出来事に Auseinandersetzung、運動の面白い世界との相互作用に浸りながら創発的に技能や身体能力の高まりをうながしていく手立てである。

今回の綾南小学校の実践では、「ひろげる」活動の中で、「やってみる」で経験した4つの障害物を全部コースの中に置き、それらを置く順番を自分たちで工夫できるように設定したり、1回戦の終了後に、相手チームの場を経験したりすることにより（場交換リレー）、2回戦の場づくりに生かすことができるようにする、というような手立てが打たれている。

ここで関心を寄せたい点は、今回提案されている障害物リレーでは「どこに障害物を置いたら勝つことができるか」にめあてがおかれているのではなく、「どこに障害物を置いたらさっきの動きと違うのか」、動きの面白さの違いに意識を焦点化し、めあてがおかれていることである。子どもたちは勝ち負けに関心を寄せがちであるが、動き

の面白さに気づかせていく丁寧な手立てである。

(2)「運動の特性に触れる楽しさ」と

「運動（動き）の面白さ」に触れる

今回の体育科の改訂では、「運動の特性や魅力に応じて、身体能力や知識・技能を身に付けることができるようにする」と示している。「楽しさ」や「運動の魅力」に触れる観点である。このことは、知識・技能の重視と運動の特性に触れることとの学習指導上の手続きに密接にかかわることとして注目したい。

運動の魅力とは、観点の置き方によってさまざまにとらえられようが、ひとつには、運動の構造的な特性と子どもとの関係性から「運動（動き）の面白さの特徴」をとらえることが、学習指導上有効である。例えば、障害物走では「力いっぱい走りながら障害をうまくすり抜けたり、かわしたり、跳び越えたりしながら移動することができるかどうかの面白さ」を、動きの様相の面白さとしてとらえることができる。こうしたとらえ方が学習指導上有効としたのは、運動（動き）の面白さに触れることによって、内発的に動機づけられながら運動の構造、すなわち技能の習得を図ることができるとともに、何よりも運動場面における状況の中で技能および思考・判断などの意味が面白いと感じ取られ、わかっていくということである。

また、学習指導を工夫していくうえでの「面白さ」と「楽しさ」の取り扱いについて、「めあて学習」では運動の特性に触れる楽しさを一義的に取り扱ってきた。しかし技能の習得が求められるこれからは、そこへの十分な配慮が必要であると考える。そのためには、運動（動き）の面白さに触れることを基本とすることが大切のようである。つまり、やさしい運動（動き）の面白さに十分触れる経験を経て、「運動の特性に触れる楽しさ」を求めていく過程を構想するということである。

綾南小学校の今回の実践は、はじめに競走ありきではなく、走るという動きの面白さに十分触れさせることを大切にし、その手続きを経て、競走する楽しさに触れさせることをねらっているところに授業づくりの新しさを見出すことができる。

(ほそえ・ふみとし)

【参考・引用文献】

- 1) 近藤智晴『「気づきや身体経験」と「身体能力」』体育科教育学研究第24巻第1号 2008・4 体育科教育学会

「人とのかかわり」の中から 技能向上と運動の楽しさ体験を

宮城県仙台市立宮城野小学校教諭 関谷 俊一

はじめに

子どもたちは、体育が好きでほとんどの運動に対しておおむね意欲的に取り組むが、マット運動については興味・関心が低い。繰り返し練習することで技能向上に結びついていると感じてはいるものの、友達にアドバイスをするなど「人とのかかわり」の中から技能向上を図ろうとする児童は少ない。

■実践内容

●単元名…マット運動

●単元目標

- ・マット運動の楽しさや技能が向上することの喜びを感じ、進んで取り組もうとする。また、互いに協力し合い、安全に注意をはらいながら運動しようとする。〈関心・意欲・態度〉
- ・学習資料や学習機器の活用、また友達どうしてアドバイスをし合う活動を通して、技のポイントに気づいたり自分の課題を考えたりすることができる。〈思考・判断〉
- ・主として回転する技や倒立する技の中から、自分のできそうな技に取り組み、正確にできるようにしたり、他の技を組み合わせたりすることができる。〈技能〉

●運動の特性

○一般的な特性

- ・主として回転技・支持技・バランス技などの中から自己の能力に適した技を選び、それらの技を繰り返したり組み合わせたりして、楽しむことができる運動である。
- ・仲間といっしょに技に取り組む楽しさや教え合い・励まし合いを通して、より難しい技や新しい技に挑戦しながら、できる喜びを味わえる運動である。
- ・より美しい動きへと技の技能を高めたり、新し

い技へと挑戦することに視点をおくことによって、運動の機能的特性を身につけることができる運動である。

○児童から見た特性

- ・高難度の技ができるようになったときの充実感を味わえる運動である。
- ・個人技能を仲間と教え合いながら高めることのできる運動である。
- ・自分の課題を見つけ、1人でも練習して技能を高めることのできる運動である。

●対象児童…6年1組

●指導にあたって

地区研究の視点と関連づけ、以下の「技能」「意欲」「人とのかかわり」について指導にあたる。

子どもにつけたい力	伸ばすための道筋や手だて
技能面の向上	①補助運動 ②ポイントがわかる学習資料や理想的な技のVTR、ビデオカメラ等の機器の準備。
意欲面の向上	友達やグループ内での励まし合いを奨める。
人とのかかわり	①技のポイント表を工夫 ②最後の発表会をグループごとの発表会と設定。友達どうしてアドバイスをすることで、お互いの技を向上させようとする意識をもたせる。

●単元の学習計画（次ページの上参照）

●実践にあたっての工夫

(1)導入について

単元の導入で、技の紹介や、理想的な動きをVTRで見せることにより、興味・関心を高めさせ

〔単元計画表〕

時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
		個人のレベルアップ（技能）				グループのレベルアップ（人とかかわり）				
10	・授業の見通しをもつ。 ・場の設定を行う。 ・新しい技を知る。 補助運動 自分のできる技を確認する。	準備運動・補助運動								
20		・開脚前転 ・とび前転 ・開脚後転 ・後転倒立 ・伸膝後転 ・伸膝前転 ・側転		・倒立前転 ・側方倒立回転 ・ロンダート ・前方倒立回転 跳び ・バランス技、ジャンプ つなぎ技			めあて1 〔選択課題〕 組み合わせ技 〈例〉 側方倒立回転→開脚後転 →後転→倒立前転→開脚前転			発表会をしよう
30							めあて2 〔グループ練習〕 発表会に向けた練習			
40		授業のまとめや、次時の見通しをもつ。								

る。自分の今できる技から考えて、個人の目標を設定させる。それに向けてどのような練習方法で取り組むのか、学習の見通しをもたせる。また、最後の発表会はグループごとの発表会とすることを伝え、友達どうしてアドバイスをして技能向上に役立てる意識をもたせる。

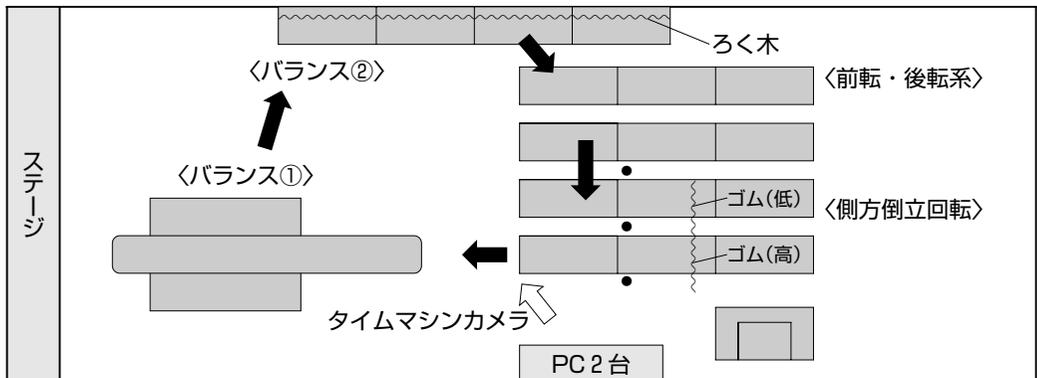
〔2〕補助運動について

クラスを大きく4グループに分け、ローテーションする。(図1参照)



<前転・後転系>	<側方倒立回転>	<バランス①>	<バランス②>
①ひざ伸ばし前転 ②ユウレイ回り ③肩越し回り	①川とび ②ゴムとび回り	①かえるの足打ち ②かえる倒立 ③V字・水平バランス	①ろく木さか立ち ②壁さか立ち

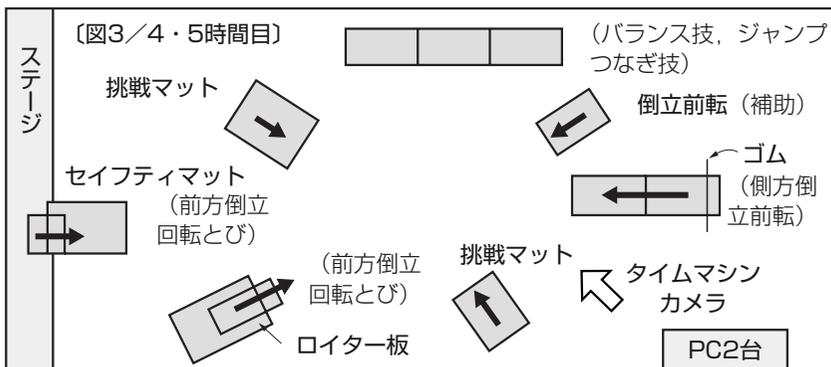
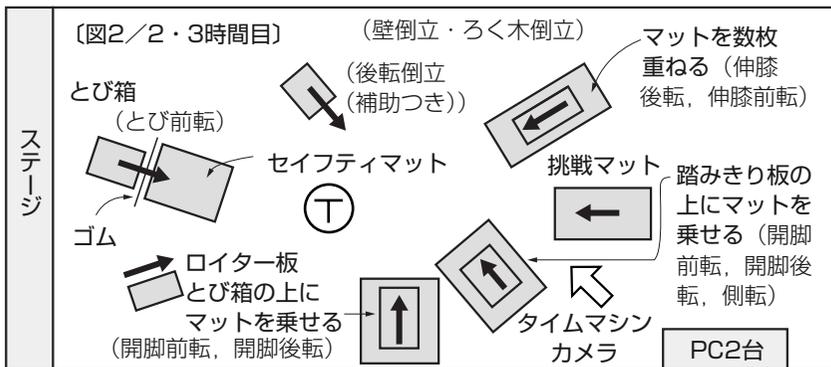
〔図1〕



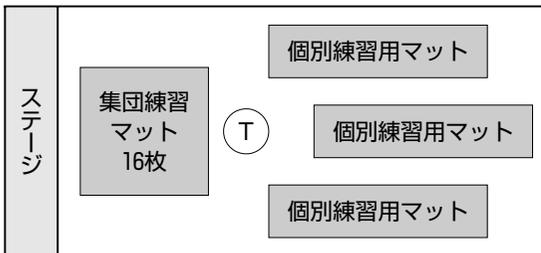
(3) 2～5時間目は個人の技能の、6～9時間目はグループのレベルアップ

①授業前半は、グループごとに組み合わせ技を練習する。アドバイスタイムを入れて、個人技について友達どうしアドバイスし合う。(図2, 3参照)

②授業後半は、発表会に向けた集団マットの練習時間とする。グループは前時までの児童の実態を把握しておき、教師側でグループづくりを行う(1グループ6人)。グループ内で音楽に合わせるためのポイントなどをアドバイスし合う。



グループごとにそれぞれ友達の技を見て、アドバイスをする。その後アドバイスを生かし練習をする。



(4) 発表会について

- ①グループごとの発表会とする。人数は1グループ6人。
- ②「学習カード」の難易度別の技をそれぞれ1つ以上必ず入れて、グループで演技をする。
- ③1人2種目以上の技を組み合わせる。バランス技なども入れる。
- ④音楽に合わせて演技をする。音楽は事前に各グループに選択させておく。

(5) 学習資料・機器

- ①技のポイントを示した図を掲示し活用させる。
- ②「タイムマシンカメラ」を活用し、自分の技をその場で確認させる。
- ③理想的な技が見られる動画を取り込んだパソコンを準備し、児童のイメージを高めさせる。

(6) アドバイスタイム

授業の中で適宜アドバイスタイムをとる。グル

■まとめと今後の課題

子どもにつけたい力を3点に絞って取り組んだ結果、次のような成果が得られた。

<技能面の向上>

お互いにアドバイスをする姿が多く見られたことから、技のポイントをつかむことができた。また、児童1人ひとりののできる技が増えた。

<意欲面の向上>

休み時間から練習する姿が見られた。

<人とのかかわり>

お互いにアドバイスしたり、励ましたりする姿が見られた。

一方で、見合う際のポイントをしっかり理解していないと何をアドバイスしたらよいかわからなくなるので、「技のコツ」や「達成度」などを具体的に示す必要があると感じた。また、1時間の中で自分が挑戦してみたいものに自由に取り組ませたため、1つひとつの技にかかる時間が少なくなり、精度を高めることができなかった。

これからも、「人とのかかわり」の中から技能向上を図り、運動の楽しさを味わうことができるように授業実践を積み重ねていきたい。

(せきや・しゅんいち)

仙台市 小学校教育研究会 体育研究部会

仙台市立南中山小学校校長 紺野 利次

1 発足と歴史

体育に携わる大先輩にお話を伺ったところ、初代会長である荒巻小学校の第4代校長、壺省吾先生が在任した昭和41年がこの会の発足とのこと。したがって今年で45年目となる。

「子どもたちが運動に親しみ、できた喜びを味わう姿を見たい」という教師の願いは同じだと思う。私たち体育研究部会は、指導力の向上に励むべきということで発足したものと考えます。

これまで授業研究会とあわせ、陸上記録会・水泳記録会・バスケット練習会・サッカー練習会・スキー実技研修会等を行ってきたが、諸事情から現在は授業研究会と、実践活動としての陸上記録会の運営を2本の柱として取り組んでいる。

2 今年の取り組み

今年度の会員数は345名。仙台市を7つのブロックに分け、研究推進部と実践活動部に分かれて活動している。研究テーマは『生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎をはぐくむ体育学習を求めて』として「子どもたちに身につけさせたい力」と「伸ばすための道筋や手だて」の明確化を視点に研究を積み重ねている。

実は、宮城県の児童はここ何年間か「体位は全国トップレベルであるが、体力は全国で下位に位置している」といわれてきているので、何とか体位に合った体力を身につけさせたいというのが本場のところなのである。そのために生涯にわたって運動に親しむ児童を育成するということはたいへん意味があることといえる。

実践活動としての陸上記録会の運営では、今年度新しい試みを行った。それは、実業団や学生のトップレベルの選手の走力や跳躍力、投てき力を教師や児童に、そして保護者にも触れさせたこと



である。陸上競技のすばらしさを感じ、あこがれの気持ちを抱き、陸上競技に限らず運動に取り組んでみたいと思わせることができないかと考えたからである。

陸上記録会は9月15・16・17日の3日間、好天に恵まれ、所期の目的を達成することができた。やり投げの国内ランキング2位の選手によるソフトボール投げの100mを超える大投てきや、大学の走り幅とびの選手の7mを超える大ジャンプ、そしてインターハイ短距離で上位入賞した選手による100m走での圧倒的な走りに大きな歓声があき起こった。

大会期間中、新型インフルエンザの流行のため126校中6校が参加できなかった。研究会として何とか陸上競技場に立たせたいとの思いから、教育委員会や小学校長会と相談をし、9月25日に6校合同大会を開催することができた。大会役員不足のため、研究会員である校長たちも昔取ったきねづかとばかり、審判や監察係を引き受け、生き生きと動いていた。あとから聞けば、皆が皆「背広を着て見ているだけよりよっぽど楽しかった」と答えてくれた。私も同感であった。

3 今後の取り組み

前述の通り宮城県では、児童の体力向上は学力の向上とともに、継続して力を入れて取り組むべき課題である。本研究会もこの課題に正面から取り組み、教員の体育の授業力の向上をめざして研究を深め、成果を子どもたちに還元できるようにしていきたいと考えている。

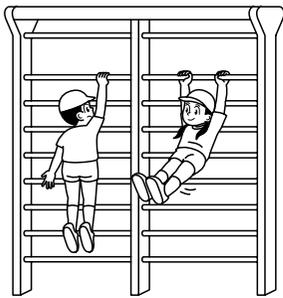
また、スポーツのすばらしさを感じられるよう、陸上記録会におけるトップアスリートだけでなく、仙台市に本拠地を置くサッカーの『ベガルタ仙台』やプロ野球『楽天ゴールデンイーグルス』、バスケットボールの『仙台89ERS』の理解と協力を得ながら、本物のよさに触れさせることも進めたいと考えている。(この・としつぐ)

鉄棒運動につながる前段運動は、固定施設を使つてたくさんの運動経験を広げることが大切です。高さへの恐怖感、逆さになる感覚、体を振る、回転する、腕で体を支えるなどいろいろな感覚は、固定施設を使つて遊ぶことで、鉄棒運動へつながっていくと考えられます。

また、鉄棒の授業でもすぐに技を意識させるのではなく、鉄棒で遊ぶという感覚、鉄棒に親しむというねらいで始めることが、意欲にもつながると考えられます。

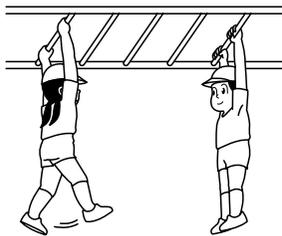
ぶらさがる

◇肋木で



◇うんていで

・向かい合って足じゃんけん



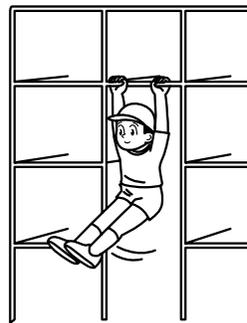
◇登り棒で

・Y字バランス

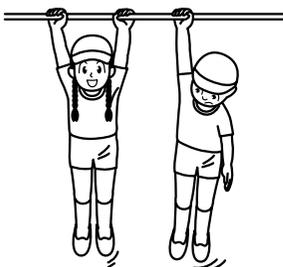


◇ジャングルジムで

・プランコ(両手で)

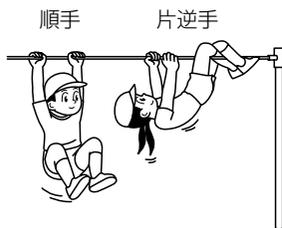


◆鉄棒で



・両手で ・片手で

・プランコ ・おさるさん



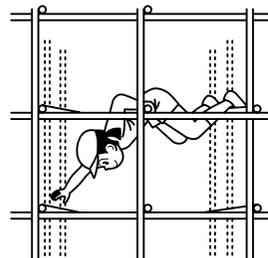
逆さ感覚

◇ジャングルジムで

・こうもり



・逆さおり



※腰の位置が高くなりすぎないようにする。
腕で体をしっかり支える。

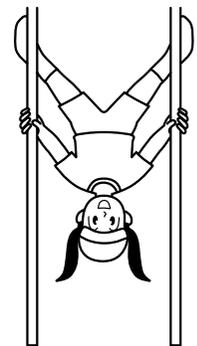
・逆上がり



※まわりの棒に足をかけて。

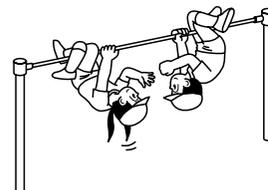
◇登り棒で

・あめんぼう逆立ち

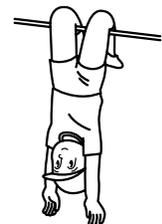


◆鉄棒で

・おさるさんで
じゃんけん

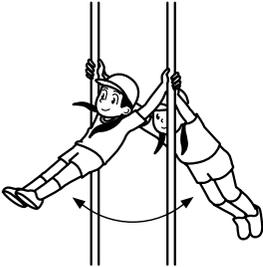


・こうもり

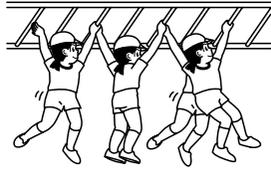


振る

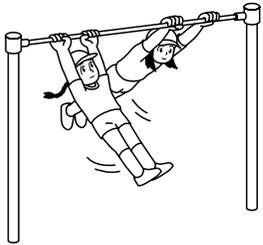
◇登り棒で
・ブランコ



◇うんていで
・1つ抜かし



◆鉄棒で
・ぶらさがり振り

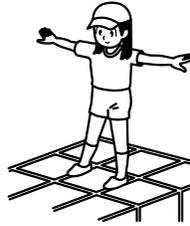


・こうもり振り



高さ感覚

◇ジャングルジムで
・タワー

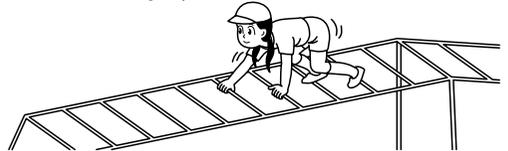


・後ろ向きで

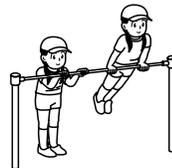


※1段低いところから始める。

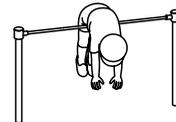
◇うんていで
・上をかがんで歩く



◆鉄棒で



・とび上がり



・おふとん



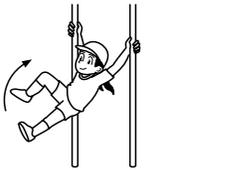
・こしかけ

◇ジャングルジムで
・前回りおり

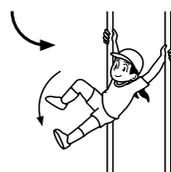
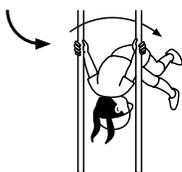


回る

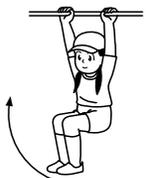
◇登り棒で ※手の位置を背の高さで。
・足抜き回り



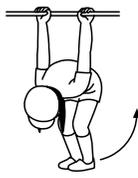
・しり上がり



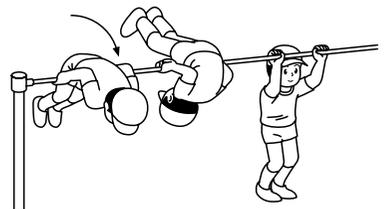
◆鉄棒で
・足抜き回り



・しり上がり



・前回りおり





アマチュアの復権はあるか

ジャーナリスト 岡崎 満義

無償のスポーツから有償のスポーツへ

最近、刊行された『東京オリンピック1964』（フォート・キシモト：新潮社編）には、懐かしいアスリートたちの写真が満載で、飽きることなく見入った。女子バレーボールの東洋の魔女たち、マラソンの円谷幸吉、女子80m障害の依田郁子、アントン・ヘーシクに敗れた柔道の神永昭夫、重量挙げの三宅義信、体操の遠藤幸雄、男子100mのボブ・ヘイズ、マラソンのアベベ・ビキラ、女子体操のベラ・チャスラフスカ、女子砲丸投げのタマラ・プレス……など、その若々しい姿にしばし見惚れた。

写真を見ているだけで十分楽しめるが、この本には当時の人気作家のオリンピック観戦記があわせて掲載されており、それが意外におもしろかった。2016年のオリンピック招致の先頭に立った石原慎太郎・東京都知事も、一作家として閉会式をレポートしている。

「獲得された金メダルは予想の数を上回りはした。しかし、我々は競技を通じて、自分自身の内に欠けているものについてはっきりと知らされた筈である。そして、それは何か。

オリンピックが終わった今、私はある外国人が日本について言った『臆病な巨人』と言う言葉を思い出す。

我々は、その呼称から脱け出すためには、何をしなくてはならないか。その反省自戒を、この競技の祭典は暗示してくれた筈である。（中略）たかだかスポーツと、言うなかれ。たかだか無償のスポーツであるが故に、我々は我々の最も深部に欠けているものについて知らされるのである。

そして、それをとり戻す術への暗示は、我々のある代表たちによって示された。女子バレー、レスリングの勝利が教えたものは何か。

即ち、身心をかけて努め、闘うということの尊さ

である。我々は、今日の文明の非人間的な便利さにまぎれて、それを忘れてはいはしないだろうか」

初々しいまでのスポーツ賛歌である。そして、今や「無償のスポーツ」は消え、「有償のスポーツ」ばかりが、わがもの顔でまかり通ることとなった。

もうひとつ、剣豪作家・柴田錬三郎の観戦記に目が止まった。男子100mのボブ・ヘイズの爆走に言葉を失うほど感動したと言い、さらに続けて印象深いシーンを描いている。

「……三千メートル障害の予選で、黒人選手が、ほとんど二周おくれながら、ただ一人、けんめいに走った光景であり、優勝者以上の拍手を送られたのは、当然であった。最もオリンピック的風景が、それであった」

そして、次のようにしめくくる。

「勝者には、勝者の美しさがあり、敗者には、敗者の美しさがある。それが、オリンピックの栄光というものであろう。

プロにおいては、この栄光は、ないはずである。敗れば、それは、無残である。アマチュアの場合は、敗れてなお、その必死な姿に、拍手が贈られる」

オリンピック憲章の中に、アマチュア規定があったころの、つまりはよきアマチュア・スポーツの時代の、幸福な光景を柴田錬三郎は心からたたえているのである。プロ・スポーツ万能時代の今、そんな幸福はどこかに消し飛んでしまった。

昨年末、スポーツ紙は連日、タイガー・ウッズの自動車事故から発した“大量（10数人）愛人”問題を大々的に報じた。清潔なスーパーアスリートのイメージが失われたと、アメリカのテレビからタイガーのCMはすべて消えたという。まさに、天の高みから地に墮ちたイカロスである。

ゴルフ界の記録を次々に塗り変えたタイガー・ウッズは、デビュー以来、何百億、何千億円を稼

いだのか、詳細は知らない。貯めこむだけではなく、社会貢献にもお金を使ったことだろう。使っても使っても、お金はある。今度の不倫騒ぎで驚いたのは、大量愛人の存在よりも、最初に発覚した愛人に口止め料として8千万円を申し出た、との報道だった。清潔な英雄、品位のある天才ゴルファー、模範的な家庭人、というイメージを守るためとはいえ、口止め料に数千万円を右から左にボンと出せる財力とその発想に、しばし茫然とした。

スポーツは高度大衆消費社会の中で、巨額マネーが飛び交う“産業”となった。プロのものさしはマネーだけになったかのようだ。米大リーグのホームラン王たち、マグワイア、ソーサ、ボンズ、ラミレス、ロドリゲスらが様に薬物疑惑に包まれているのは、マネー至上主義の毒にあたっている証拠だろう。彼らとて、お金で最高の幸福が買えると思っているわけではあるまいが、稼いだ金でプロの価値が計られると信じているだけだろう。

消える「健闘」、浮かび上がる「マネー」

アマチュアとは何か。パートタイムでスポーツをする者だ。普通の日常生活の中に、その一部としてスポーツがある、というライフスタイルをもつ者である。プロはフルタイマーであり、スポーツの一部として、普通の日常生活がある、という正反対のスタイルだ。札東で天高く押し上げられるプロ・アスリートにも、俗な地上の日常生活はある。札東で押し上げられた天の高みの聖なる場所（大量愛人の世界も、誰もが手が届かない聖なる場所だ）と、俗な地上の日常との目もくらむ懸隔に、いかに対処すべきか、悩みは大きいだろう。聖にしる、俗にしる「もうひとつの人格」を時と場所に応じて、演じ分けなければならない。

アマチュアには、幸いなことに、この聖俗のギャップはない。日常生活の地つづきに、アスリートとしての生活がある。アマチュアも生活を支えるお金は稼がなくてはならない。しかし、どんなに稼いだところで、聖なる高みに押し上げられるだけのお金にはならない。だからこそ、生活人として、アスリートとして、同じひとつの人格でありうる。女子サッカーのなでしこジャパンのFW荒川選手がスーパーのレジ係をしながらサッカーをしたのが一例だ。

タイガー騒動のさなかに、東京五輪マラソン銅メダルの円谷幸吉選手を育てた畠野洋夫コーチ

(76)の訃報が新聞に載った。昭和43年1月に「父上様、母上様、幸吉はもうすっかり疲れ切ってしまって走れません。何卒お許し下さい。気が安まることもなく御苦勞、御心配をお掛け致し申しわけありません。幸吉は父母上様の側で暮らしとうございました」という哀切な遺書を残して自死した円谷選手のことを、久しぶりに思い出した。オリンピックがアマチュアの祭典であったころの、いわば最後のアマチュアであったのが円谷選手だ。

1974年、キラニンIOC会長時代に、オリンピック憲章からアマチュアの文字が消え、1984年のロス五輪で、ピーター・ユベロスというやり手の組織委員長が商業オリンピックへと劇的に変革してから、オリンピックはプロの祭典となった。アマチュアは技術レベルの低い、単なるプロ予備軍、あらゆるスポーツがプロ化を目指しはじめた。高額賞金の競技大会が次々に生まれ、マネーがアスリートを計る唯一のものさしになった。社会がアマチュアであることを許さなくなった、と言っているかもしれない。

オリンピックの創設者クーベルタン男爵の「オリンピックで重要なことは、勝つことではなく、参加することである。人生で大切なことは、成功することではなく、努力することである」という有名な言葉は、ペンシルバニア大司教の「人生において大切なのは勝利ではなく、闘いであり、最も重要なのは勝利したことではなく、健闘したことだ」という言葉を下敷にしているといわれている。「健闘」はプロにはなく、アマチュアのみにある。柴田錬三郎が指摘したように「アマチュアの場合は、敗れてなお、その必死な姿に、拍手が贈られる。私のような者が書齋から出て、スタンドで、固唾をのむゆえんである」のは、まさに人生における「健闘」の価値を、日常生活と地つづきのものとして実感できるからである。スポーツから「健闘」が消え、かわって「マネー」が大きく浮かび上がったわけである。敗れることにも栄光がある、ということを教えてくれたスポーツが、すっかり様変わりして、ただただ最高の技を見せるだけのものになってしまったのである。

これから、アマチュアのもつ価値を復権することができるのか。いったんプロのマネー至上主義にふれた振り子はもとは戻らないとするならば、スポーツを人間社会の中にどのように位置づけるのか。まことに難しい時期を迎えている。



やってみる—ひろげる—ふかめる

座談会：新たな学習過程の構想をめぐって



東京学芸大学附属世田谷小学校教諭 鈴木 聡
筑波大学教授 村田 芳子
東京学芸大学教授 細江 文利
司会・国士舘大学教授 池田 延行

池田 本日はお忙しいところ、お集まりいただきありがとうございます。ご承知のように新学習指導要領が告示され、現在はその移行期を迎えています。移行期というのは、リレーに例えれば、バトンゾーンの中でいろいろなことが試されるときだと思います。そして平成23年度から、新学習指導要領の完全実施という形になります。そうした状況の中、今日は4人の先生方で、特に学習の進め方に焦点をあて、お話を進めていければと思っています。どうぞよろしく願います。

■移行期の授業づくりにみる懸念と期待

池田 それでは最初に、この移行期の授業づくりについて、感想などを手短にお話いただけますか。

鈴木 授業研究や研究会などに参加させていただいて、私はやはり、数年で大きく様相が変わってきているという印象をもっています。指導案1つとってみても、今まではどちらかというと子どもたちの個のめあてや、個に応じてどういうふう guidance をしていくか、ということが語られることが多かったわけですが、最近は、“できる”“わかる”という2つがキーワードとなっているように感じます。できるようにさせるための教師の「求め」が非常に強くなっている、という印象です。例え

ば、先日見せていただいた授業では、学習過程が、子どもの学びの道筋をほとんど考慮に入れないような形でしくまれていました。1時間目はこれ、2時間目はこれ、3時間目はこれというように、コートやルールを教師が決めて、それを子どもになぞらせていくといった学習過程になっているわけですね。もちろんそれはやみくもに与えられているわけではなく、当然、教師の願いや、こうなってほしいといった意味があつての学習過程のしくみ方だとは理解できます。ただ、子どもにとっては、与えられたものを1時間目に深めきれなくても、すぐ、次の時間にまた違ったルールやコートを先生から与えられるということになってしまいます。そうした学習スタイルに対して、子どもはいったいどういうふうにとらえるだろう、という疑問が湧いてきました。ともすると、教師の指導性のほうにばかり目がいってしまい、少し子どもたちのことが語られなくなっているのでは、という危惧があるというところが正直な感想です。

村田 確かに私も、学習指導要領の改訂が始まる2、3年前から、これまで子どもの側に向いていた学習指導の方向性が、急速に、教師の側に振れそうな危機感をもっていました。実際に改訂が始まると、「生きる力」は大きなコンセプトとして

残りましたが、しかしそこで、子どもたちが生きていくために何を教えるのかということを探したときに、ともすると、“できる”が目標化し、そこにまた評価の問題が絡んできて、少し学習指導が固い方向に進んでしまうのかな、という危惧も感じているところです。

細江 新学習指導要領については、発達段階に応じた指導内容の明確化や内容の系統性の重視といった、わかりやすいスローガンがあると思うんですね。そうしたわかりやすさは、現場に浸透しやすい。そういう意味で、技能を身につけさせるという傾向は確かに進んできているのではないかと思います。

池田 新学習指導要領のもとでの移行期の授業について、3人の先生方からある種の懸念事項がありました。現在は、新学習指導要領のもとでの移行期ということで、低・中学年の体づくり運動の新設、またボール運動系の内容の区分けの変更を受け、現場では特にその2つの領域で、活発な授業研究が行われていると思います。その部分に関して、より具体的に、授業の印象をもう少しお話いただきましょう。

細江 先ほどは技能重視化傾向の流れを述べましたが、しかし一方では、そのような技能重視の学習の方向性に警鐘を鳴らすものとして「動きの面白さ」ということに着目して技能を身につけさせていこうとする試みも、いたるところで出てきています。技能そのものの面白さを「動きの面白さ」という観点でとらえ直すことで、技能を身につけさせるという実践も多く見られるので、その方向性はよいかと思っています。例えばボール運動系の授業研究については、「子どもにとって、ボール運動のどんな動きが面白いのか？」と考えたときに、ゲームの局面ということがクローズアップされはじめています。ゴール型でいえばバスケットボールの「シュート」局面への面白さに触れさせる、といった授業づくりが出てきたり、ネット型でいえばバレーボールの「組み立てて、ボールを落とすか、落とさせないか」という局面の面白さに触れさせようとしたときに、キャッチバレーのような実践が出てきたりしていると思いますね。それは大変面白い試みだと思います。一方では、「ドリル・タスク・メイン」といった、学習過程に当てはめた、系統性を大切にしたい授業づく

りもあるようで、これもわかりやすさという視点で多くのところで実践されているのではと思います。こうした違いがどこにあるのかを現場では明確にして、実践が進んでいけばと思っています。鈴木 私もボール運動について少しお話をしたいと思います。ボール運動を学習するとき、例えばボール操作の技術やボールを持たない動き、戦術などを子どもたちが体得することにはまったく異論がないですし、そこは私も非常に大事だと思っています。しかし、運動を学ぶ意味って何だろうと考えたときに、やはりどの領域でもすべてそうだと思いますが、細江先生の言われるような「どうしてその技能が大事なんだろう」といった学びの意味や、もしくは面白さそのものを、子どもたちがどのようにつかみとっていくのかということに、もう少し目を向けた指導過程を組んでいかななくてはならない、と最近よく思います。

村田 体づくり運動については、今まで高学年だけだったものが低・中学年においてきましたが、特に低・中学年では、高学年の体力を高める運動のようなトレーニングになってはいけないという意味合いもあり、「多様な動きをつくる運動」という新しい名称と内容になりました。文部科学省からもパンフレット等が発行され、その考え方や例示が出ていますが、私が少し気になっているのは、多様な場をつくって、ところてん方式に順番に回っていく実践が低・中学年によく見られることです。あれで学習といえるのだろうか、と疑問に感じます。最初は羅列的に提示したり、先生が例示したりとさまざまな模索があると思いますが、「なぜその多様な体験をさせていくんだろう」ということを先生がしっかりもっていないと、授業が空回りする印象があります。やはり「多様な動きをつくる運動」では、スポーツの技能につながる土台になる、体の中のさまざまなセンサーをはたかせていくという、身体能力というより身体感覚に近い部分をおさえることが大切だろうと思います。先ほど細江先生が動きの面白さと言われましたが、具体的にいうと、例えば「バランス崩し」のように、崩すことでバランスをとることがわかるといった切り口から、そうした動きの意味、面白さをしっかりおさえないと、ただ行わせるだけになってしまうという感じがしています。しばらくは模索が続くでしょうが、やはり体力を高め

る運動とは違う、低・中学年の子どもにとって面白い動きの体験になればと思っています。

池田 私も先生方の意見については同感です。ひと言で言うと、運動の特性論をもう一回きちんとふまえた授業づくりを確認していく必要があるだろうと思います。この運動の特性論は昭和40年代から現在まで、基本的には変わっていません。にもかかわらず、ややもすると技能が先行し、そこが終着点だというような授業が今後行われかねないということですね。今後のわれわれの議論もそのあたりをふまえていきたいと思っています。

■「習得—活用—探究」と

「やってみる—ひろげる—ふかめる」

池田 今、新学習指導要領のもとでの授業づくりの印象などを述べていただきましたが、今回の学習指導要領が指導内容の明確化や内容の系統性の重視といったスローガンを掲げていると、やはり授業づくりもそちらの方向からという印象もあると思います。ここで今日の座談会の本題に入っていきたいと思いますが、そうした学習指導要領の基本的な考え方は、いわゆる習得型、活用品、探究型という、中教審の答申の学習スタイルとも関連していると思われまます。細江先生から、今回の中教審の学習スタイルの意味すること、またそのねらいなどについてお話いただければと思います。

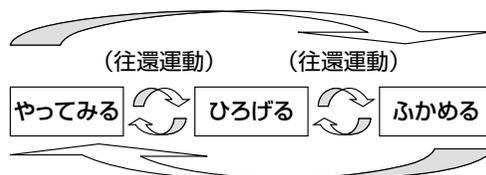
細江 今のお話の通り、習得型、活用品、探究型というのは、中教審における議論の中で話された内容です。それを受け、学習指導要領の小学校教育の目標の中にも、「習得」「活用」という言葉が明記されています。その「習得—活用—探究」という学習スタイルをどのようにとらえるかということですが、学習過程には、「何を学習していくのか」に観点を置いた学習過程と、「いかに学習をしていくのか」に観点を置いた学習過程の2つの考え方があります。中教審の「習得—活用—探究」という学習過程はどちらの考え方のかという、後者の視点に立った考え方です。教師側の学習の進め方の概念であるともいえます。しかし、学習過程というのは本来子ども側の概念ですから、子どもにとって、どんな段階をふんでどんな学習を進めたらいいかということ、わかりやすく提示する必要が出てくるだろうと思います。そこで、私は「習得—活用—探究」を、「やってみる—ひ

ろげる—ふかめる」という言葉に置きかえることを提案しています。綾南小学校でも実践いただきましたが（※本号p6-11参照）、そういう意味で、「やってみる—ひろげる—ふかめる」という言葉を使うことは、子どもたちに対して、今どんな学習を進めたらいいのかということを示唆する手続きだと考えていただければ、と思います。

池田 今、話の中で、「何を学習するのか」ではなく、「いかに学習するのか」が中教審の答申の学習スタイルの考え方というお話がありました。それを子どもたちの側からの学習のプロセスとしてとらえると、「やってみる—ひろげる—ふかめる」という言葉になるということですね。ここで、「習得—活用—探究」の学習スタイルに依拠した「やってみる—ひろげる—ふかめる」という言葉がこれからの体育における学習過程の提案としてあがったわけですが、今までの「ねらい1・ねらい2」や「めあて1・めあて2」という考え方との基本的な違いを、細江先生から簡単に説明いただき、議論を進めたいと思います。

細江 めあて学習で構想された「ねらい1・ねらい2」「めあて1・めあて2」という学習過程の考え方は、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育成するための態度形成に中心があったと思います。運動の特性、いわゆる楽しさに触れさせながら、生涯にわたって運動を実践していく基礎を培うということにねらいがありました。だから楽しさという動機づけが中心だったのだと考えられると思います。もっと詳しく言うと、楽しさの動機づけから今もっている力で十分運動を楽しみ、その楽しさにより動機づけが促進され、さらにそれをエネルギーにして工夫して運動を楽しむという発展過程で、学習過程が考えられていたということです。しかしこれからは、先ほどお話にありましたように、発達段階に応じた指導内容の明確化や内容の系統性の重視ということで、知識や技能を確実に身につけさせることが問われてきます。そういう意味では、どうも楽しさによる動機づけだけでは、体育は説明責任を果たせないのではないかという考え方から、知識や技能を確実に身につけさせる学習過程というものも一方では考える必要が出てきました。そしてその学習過程は、知識や技能を形式的に身につけさせてからそれを工夫、発展させるという学習過程ではなく、知識や

図 学習過程の新たな提案



- ◆ 「やってみる」…教師が提示するやさしい動きや運動を行う。
 - ◆ 「ひろげる」……理解したことを広げたり、アイデアを出し合ったりする。
 - ◆ 「ふかめる」……願いやこだわりを膨らませたり、それをみんなで共有したりする。
- ・ 3つのフレームはオープンエンドな（先が開いた）関係

（光文書院『やってみる ひろげる ふかめる』p29 より）

技能をいかに子どもたち自身が身につけていけるかという観点に立った学習過程だと理解することができると思います。そうした学び方の視点を重視して、今回は「やってみる—ひろげる—ふかめる」という学習のしかたを考えていると理解していただいてもよいと、私は思います。

村田 今回の学習指導要領では、確かに知識や技能を確実に身につけさせることが問われていますが、細江先生がおっしゃるように、形式的に身につけさせるだけでは単なる習得で終わってしまいます。「習得」の対極に「探究」があり、その両者の間に「活用」の概念が示されているとすれば、やはりこの「習得—活用—探究」をどう授業の中に組み込み具体化していくかということが、結局「できる」だけではない授業を実現していくカギになると思います。今までは運動の楽しさを重視していたため、教えるべき技能の中身を前面に出すことをおさえ、子どもの自発性を大事にしようとしてきました。これからは、子どもが自発的に活用し、さらに探究につないでいけるもとなる重要な内容を「習得」という形でとらえていけばよいのでは、と思います。

そうした子どもが活用し探究していくための共通のおさえるべき内容が、「やってみる—ひろげる—ふかめる」の学習過程の中ではより前面に表れ、子ども側の言葉で「やってみる」と表現されているのだと思います。この「やってみる」を表現運動で考えてみますと、表現運動はゴールフリーな学習が特徴ですが、だからといって最初から「自由にどうぞ」ではダメで、広げていくためには、題材の「これだけは」という共通の動きを、先生と一緒にやったり先生から言葉をかけたりして、まずやってみることが必要です。その内容は、先ほど話があった、子どもにとっての「動きの面白さ」とも重なります。その「やってみる」を受けて、それを再構成したり、あるいは違うものに応用したりする形で「ひろげる」という流れが生まれます。「これだけはおさえない」ということを明確にしつつ、しかしそこで学習が終わりではないということであり、さらにそれをバネとして活用し、自分たちで創造していくという大きな探究の学習につなげていくわけです。つまり習得だけでなく、それをもとにした活用、探究という部分を実現して初めて、「生きる力」と「基礎・基

本」のような一見相反する2つを、どちらかに偏るのではなく、融合できるのだと思います。

池田 従来のめあて学習においても、重要な内容はもちろん指導していました。一方、新しい学習過程では、最低これだけは教えるということをやより明確にし、子どもたちに「やってみる」という形で提供しながら、やはりそれをきっかけに「ひろげる」「ふかめる」という方向に学習を進めていきたいという意図があります。新しい学習過程は、そのあたりの道筋をより明確にしたと考えればいいのでは、と思いますね。

鈴木 従来のいわゆるめあて学習に対しては、「個を重視するばかりに、たくさん子どもたちがそれぞれの楽しみ方をしてしまい、先生たちがそれを束ねられない」といった批判が語られていました。しかし、必ずしもそういうことではないのだということが、最近ようやくわかってきた部分もあります。つまり、村田先生がおっしゃられた「共通におさえないこと」ともつながりますが、その種目なりスポーツの本質的な面白さというのが貫かれていれば、けっして子どもたちが個々それぞれに勝手なめあてをもつわけではないのではないかと、私は思うんです。大人でも子どもでも楽しみ方は1人ひとり違うと思いますが、本質的なスポーツの面白さというのは大人でも子どもでも同じです。例えばバレーボールだったら「ボールを地面に落とすか落とさせないか」、野球だったら「打った球と自分のどっちが塁に早く着くか」というような、面白さのいわゆる本質的な部分があります。そこが挑戦課題になっている、ということを手寧に学習内容として貫いていくと、



それをまず「やってみる」としてシンプルに提示し、「ひろげる」「ふかめる」につないでいくという、まさに子どもたちが運動の本質的な面白さを深化させていく学習過程が成り立つのではと思います。

池田 先ほど細江先生から説明責任に関する話も出てきましたが、「やってみる—ひろげる—ふかめる」では、教師が提示する最初のやさしい動きや運動をみんなですべてやってみながら、そこを出発点として、広げたり、深めたり、という方向に授業をもっていきたいということですね。

■教師と子どもの新しいあるべき関係性

池田 「教師が提示する」といった言葉も出てきましたが、「やってみる—ひろげる—ふかめる」の学習過程を子どもの自発性・自主性と教師の指導性の関係性という観点で見たとき、従来との共通点・相違点はどのようにでしょうか。

細江 それについては動機づけ理論ともかかわってくると思いますが、その研究の動向は、今と昔ではだいぶ変化しつつあります。かつては動機づけというと、いわゆる内発的動機づけとして一義的にとらえられており、自発性の重視がめあて学習の基本原理だったと思います。しかし現在、動機づけ研究も、教えて考えさせるということがいわれているように、外発的動機づけ、つまり教師が指導性を発揮しながら子どもを動機づけしていく重要性が見直されてきています。そうした意味で、今言いましたように、教師が指導性を発揮しながら子どもの自発性・自主性を培っていくという教育の方法、手立てというのが、これからは必要になってくるのではないかと、思います。

もうひとつ、めあて学習というのは、課題解決学習の典型だといってもいいと思います。一方、新学習指導要領では、いわゆる学習内容の明確化や内容の系統性の重視ということが打ち出されています。そのため、子どもの自発性・自主性と教師の指導性の関係性を考えたときに、課題解決学習か系統学習かという、二項対立としてとらえられる傾向が生まれていると思います。しかしそうではなく、体育の学習においては、私はあくまで

課題解決学習の中に系統学習を埋め込んでいくという手法が大切だと思います。その手法を取り入れたのが、この「やってみる—ひろげる—ふかめる」という学習の流れ、として理解することができるのではないかと、思っています。

池田 子どもの自発性と教師の指導性の問題ですが、やはり両者はけっして対立するものではなく、むしろ、子どもの自発性に教師の指導性を含みこむことが大切である、と考えればいいのではないかと、という話だったと思います。これは非常に興味深いところです。

村田 今の話と関連して、先生方が勘違いしがちなのは、先生が出すぎると子どもが引込む、子どもを生かすと先生は何もしなくていいというように、子どもと先生の間を反比例的、二項対立的にとらえてしまうということです。そうではなく、やはり子どもの自発的な学習を促進することを主としながら、指導性が思いっきり発揮される状態がよいと思います。その主客を間違えずに二項対立を超えていかなければいけないわけですが、その際、やはり今までと路線を変更するのではなく、抜け落ちていたところや、二項対立的になっていたところを補完していくという関係性を明確にしていかなければいけないと考えています。そしてそこにこそ教師1人ひとりの指導力、真価が問われるのでは、という感じがしています。

池田 先日、全国的な社会科の研究大会を参観しましたが、当日の授業では、教師が子どもたちから課題やめあてを引き出したり、それをめぐって解決する活動が展開されていました。ですから他の教科も含めて基本的な考え方はやはり課題解決学習としての子どもの学びであり、そこに指導性が含まれていくのだろうと思います。それをより明確にしていくということで、先ほど「課題解決学習に系統学習を埋め込んでいく」という細江先生の説明があったと思いますが、そのようにわれわれも「やってみる—ひろげる—ふかめる」という学習過程を考えていけたらと思いますね。

鈴木 子どもたちが課題を解決していくきっかけというのは、先ほども言ったように、やはりその初めの「やってみる」状況で教師から与えられるものだと思います。「やってみる」で面白さの本質に特化させた簡単なルールのゲームを子どもたちに提示したとき、それをもとに「もっと面白く



するには「もっとうまくなるには」といった形で学習が広がり、深まっていくということを考えると、その過程は、まさに最初の簡単な遊びのようなものから、段々といわゆるスポーツの形に洗練されていく過程とも重なるかもしれない。それはおそらく他の教科で行われている課題解決学習と一緒にあり、そうした意味でも、指導性を十分発揮しつつも子どもの自発性を十分包括しながら学びをつくっていくことは可能だと考えています。

池田 私も陸上運動の授業を時々やるがありますが、いい「やってみる」を提供すると、やはり「ひろげる」「ふかめる」が非常に加速します。そこがポイントだと思うんですね。教師が魅力的な「やってみる」をどれだけ提供できるか。そこに尽きるのではないかと。

細江 私もそれは同感で、「やってみる—ひろげる」、つまり「習得—活用」の関係は、基本的なことを身につけ、それを生かすという単純なステップアップではなく、池田先生がおっしゃったように、活用を触発するような面白い魅力のある「習得」として、基本的な知識や技能が学ばれるということがとても重要です。そこに指導性が発揮されてくることになるのでは、と思いますね。

■「やってみる—ひろげる—ふかめる」の手応え

池田 「やってみる—ひろげる—ふかめる」は、まさに教師がこれからやってみる段階で、まだ始まったばかりの学習のスタイルですが、今の段階でもその授業の手応えは出てきていると思います。そのあたりも少し、それぞれのご専門の領域でお話いただきたく思います。

村田 領域の特性で、この「やってみる—ひろげる—ふかめる」がどう意味づけられるかは若干違うと思いますが、表現運動の場合、いちばん先生方に考えてもらうのは、その1時間が何となくこうなってほしいではなく、こうなってほしいためには「やってみる」で何を取り上げ、「ひろげる」にどうつなげるか、ということです。それがうまくいくと後半スッと盛り上がっていくし、ダメだと盛り下がってしまいます。

今までも現在も、表現運動には、即興のステージと、ある動きにこだわってひとまとまりの作品をつくるステージがありますが、特に即興のステージでは、1時間の中で「やってみる—ひろげる」

が繰り返されます。「やってみる」では教師が提示した最低限の動きをやってみて、それを「ひろげる」で即興的にひと流れの動きにするという学習過程をとりますが、そこで、例えば今日は「ジャングル探検」と言ったら、その「やってみる」で子どもたちに何を提供すれば「ひろげる」がうまくいくのか。この部分を吟味しつつ「やってみる」「ひろげる」の小さな往還を繰り返します。そして最後に「ふかめる」の段階で、作品のような自分たちのこだわりのあるものをつくります。そのため、1時間の授業公開などでも、非常に明確に授業のよさがわかります。

池田 ちなみに「やってみる」「ひろげる」という言葉はやさしい言葉ですが、村田先生は、授業をされる際に先生方にも子どもたちにもこの言葉を使っていますか。

村田 むしろ習得、活用という言葉は使いたくありません。表現運動の中でも表現やリズムダンスの学習は、フォークダンスのように形の決まったものを身につけていくのとは違うので、「やってみる」のほうが、まずいろいろやってみようという意味でも、また、先生と一緒にやってみようという意味でも、導入として子どもたちにも印象がいいのではないかと思います。先生方にも一見してわかりやすいと、とても評判がいいです。むしろ前の「めあて1」のほうが少しわかりにくかったかもしれない、という感じだと思います。

池田 陸上系や器械系、水泳系もそうですが、いわゆる個人的な達成色の強い運動がありますよね。そういう領域からみて、「やってみる—ひろげる—ふかめる」の授業の手応えはどのあたりにあるのでしょうか。

細江 陸上系では、技能を身につけることは非常に重要なことだと思います。しかし、技能を子どもの側からとらえたとき、その技能のどんなところが面白いのかという観点から、技能を再解釈する必要はあります。つまり、面白さの観点からの、技能のとらえ直しを行うということですね。それを、初めにもお話ししましたとおり、動きの面白さと呼んでいます、特に「やってみる」の段階



でそうした動きの面白さにまず触れさせるといふ手立てが、冒頭でもお話ししましたように、さまざまな実践で行われはじめています。ここではハードル走を例にとりますが、まず単元の最初の「やっ

てみる」の段階では、3歩のリズムでインターバルを調子よく走る、といった試みを大切にされた授業実践があります。そうした動きの面白さに「やってみる」で触れさせてから、「ひろげる」段階では競走してみよう、記録に挑戦してみようという学習活動が出てくる。つまり、めあて学習でそうであったように、最初から特性ありきではなく、単元の最初はその運動を構成する動きのもっている面白さに十分触れ、その後に競争しよう、あるいは記録に挑戦しようという形で特性に触れさせる流れが出てきているんですね。それをここでは「やってみる—ひろげる」という学習過程で表現しているわけです。

池田 器械系はどうでしょうか。

細江 基本技から発展技の流れを、「ステップ1・2・3」のようにステップアップととらえ、学習過程を構成する実践があります。しかしその考え方だと、難しい技ができることがいいことであるという価値観を生んでしまいます。そうすると、昭和30～40年代の一斉型系統学習の実践を呼び込んでしまうことになり、またしても、「運動好きの体育嫌い」や「落ちこぼれ現象」を起こしてしまう。確かに技ができることは大切なことではありますが、器械運動にも、技の前に前段運動といわれる基本的な動きがあります。例えばマット運動の前転系では、「回転しながら移動して終末局面で立つことができるかどうか」が面白さととらえられています。その場合、その技を構成する接点技術・伝導技術といったさまざまな動きを身につけさせるために、ゆりかごや、小さなゆりかごから大きなゆりかごへといった、基本的な前段運動のもっている面白さにまず触れさせることが大切です。そうした活動は、さまざまな授業実践で行われはじめています。

池田 私も陸上系については特に関心をもって見

てみる」の段階では、3歩のリズムでインターバルを調子よく走る、といった試みを大切にされた授業実践があります。そうした動きの面白さに「やってみる」で触れさせてから、「ひろげる」段階では競走してみよう、記録に挑戦してみようという学習活動が出てくる。つまり、めあて学習でそうであったように、最初から特性ありきではなく、単元の最初はその運動を構成する動きのもっている面白さに十分触れ、その後に競争しよう、あるいは記録に挑戦しようという形で特性に触れさせる流れが出てきているんですね。それをここでは「やってみる—ひろげる」という学習過程で表現しているわけです。

鈴木 私は、子どもたちや先生たちにこの言葉が広まっていく際、1つだけ懸念がありました。「やってみる」という言葉が、「とにかくやってみよう」といった多少ネガティブな意味合いでとられてしまうこともありますよね。しかし、今お話をお聞きしていて、「やってみる」という言葉はまさに「Let's try!」の意味なのだとは再確認しました。先ほど先生がおっしゃられた、よい「やってみよう」を提供するという言葉が、私にはすごくストンと落ちましたが、子どもたちが飛びつくような、そういうスタートラインを教師がいかにつけられるかということが、そういう意味でも大切なのだと思います。

それではそれをどうやって提供するのかということになるのですが、一例として、以前実践したベースボール型の授業の話をしたと思います。*ベースボール型では、ルールが複雑なために子どもたちがスタートでしょげてしまうということがよくあります。そのため、実践にあたり、いろいろな方と共同研究しながら、概念崩しを行いました。そしてバットを使わずに投げるところから始め、先ほども言ったように「ボールと自分のどっちがベースに着くのが早い」という、本質的な面白さに特化した「やってみる」を提供しました。もちろんバットを使う、使わないには議論があるとは思いますが、子どもたちはそれによって進塁する面白さや、仲間と協同して、進塁するためにどこに投げたらいいのかといったまさに戦術的な動きの面白さにふれながら、みんなで協力して点を取ろうとします。そうしたなかで、自然とバットを使い始めたり、まさに野球のようなダブルプレーやバックアップというプレーが見られたりと、いろいろ複雑な動きが導き出されてくるわけです。そう考えると、概念崩しのような部分に、子どもたちをやる気にさせるような「やってみる」を提供するヒントが内在されていたのでは、とい

*『子どもと体育143号』実践報告+講評と助言：平成20年1月11日
(弊社HP <http://www.kobun.co.jp/> に掲載)



うことを感じています。

■「やってみる—ひろげる—ふかめる」の展望

池田 それぞれの領域で、この「やってみる—ひろげる—ふかめる」の授業の手応えが感じられているようですが、そうはいえども、今はまだ移行期ですので、これから先、こうした学習のスタイルをみんなで考えながらさらに加速していきたいと思えます。最後にひと言ずつ、この学習過程を実践するにあたり、感想や、ポイントになりそうだとするところをいただければと思います。また、この「やってみる」「ひろげる」「ふかめる」の3つのフレームはどの学年にもなくては行けないのか、といった疑問なども実践にあたり出てくると思いますが、そうしたこともふまえて、よろしくお願ひいたします。

鈴木 この指導過程をひと言で表すなら、教師が引っ張って、教師ができるようにさせる授業でもなく、子どもがやりたいことを自分たちで好きなようにやっていくという授業でもなく、まさに子どもと教師が共につくっていく授業のスタイルのかな、という感じを受けました。自分がこれまで大事にしてきた実践スタイルにもフィットしていると思えます。

村田 まず池田先生が言及された疑問についてですが、表現の場合は、発達段階や内容の特性からいっても、低学年の表現リズム遊びや中学年のリズムダンスには「ふかめる」段階は入れなくてよいと考えられます。小さい時間の中で、「やってみる—ひろげる」を繰り返していくことになると思えますね。また、先ほども言いましたが、教材研究についても、この3つのフレームは、子どもの「ひろげる」につながるような魅力的な「やってみる」をどう提示し教えていくのか、何をおさえるのか、というところを明確に教材研究できる学習のフレームなのだと思います。そして、その「やってみる」がよかったかどうかは、1時間の後半の「ひろげる」の子どもの活動を見ると、鏡のようにすぐわかる。教師にとっても、「どこを工夫すればよいのか」ということが非常にわかりやすいフレームだと思います。

細江 「やってみる—ひろげる—ふかめる」というのは、先ほども述べましたように、子どもたちにどんな学習をさせたいのか、子ども側から見る

とどんな学習をしたらよいのかという学習軸の観点から構成される学習過程です。したがって「やってみる」「ひろげる」「ふかめる」という学習のフレームは、「今子どもたちはどんな学習ができるのか」という、発達段階と学習の関係の中で構成されるということです。そのため、低学年での発達段階においては、ある意味で「やってみる」というフレームだけで十分だということがいえると思えます。一方、高学年になり、マイルールで大会をしようといった形で、今までの学習を生かしてこだわりを膨らましていくという観点でいうと、まさに「ふかめる」という学習が適切ではないかということになります。そしてそうした学習過程を通して、子どもの学習が「生涯にわたって」という意味合いに近づいていく、といった学習のしかたになってくるだろうと思えますね。そういう意味では、まず「やってみる」「ひろげる」の2つのフレームが基本になるのではないかと、と思えます。「やってみる」で魅力ある教材を提示し、「ひろげる」そして「ふかめる」方向に学習が進んでいくような、またそれに付随する意味で、学習のしかたがわかりやすいような教材づくりが、これからは必要になってくるのではないかと思います。

池田 今、細江先生から、発達段階に応じて「やってみる」「ひろげる」「ふかめる」のフレームを非常に柔軟に考えていくという提案もありました。今回の改訂は、技能や系統性の重視といったことで、ややもすると先生方の創意工夫や学校の主体性が少し窮屈になるのではないかと印象もないことはありません。しかしそうではなく、「やってみる」「ひろげる」「ふかめる」というこの3つの学習のフレームをこれからの授業づくりにうまく生かしていくとともに、子どもたちにとって本当に魅力的な教材を提供したり、面白い学習活動を創意工夫したりといった、先生方が授業づくりを活性化していくような方向とぜひリンクさせながら、これからも学習過程を検討していけたらと思っております。今日はどうも、長時間ありがとうございました。 ■

「小学校体育における習得・活用・探究の学習」 やってみる ひろげる ふかめる 小社より絶賛発売中!